

越前の一小方言について

藤原与一

0 はじめに

越前のことばは、山地方面（東部）と平地方面（右以外）とに分けて見てよいかと思われる。平地方面で、福井市の西南、電車でおよそ一時間ほどの所に、織田町がある。織田町の中心集落、織田町織田に、私は、四十三年十月中旬、一週間の方言調査をおこなった。この集落（戸数約三百）に、一まとまりの方言社会を認めることができるようである。この方言について、一つの記述を試みる。

土地の生活の中には、その方言生活を側写するというような自然傍受法の調査にとめて、諸階層のさまざまな生活場面から得た調査カードは、一二三四枚である。調査結果は、土地の人、荒木弘子氏に検閲してもらい、使用者階層・使用頻度・使用品位に関する注記を入れてもらった。

1 音声面

共通語生活上の音声面と比較して、また、他地方諸方言の音声面と比較する態度で、当「織田」方言の音声相を見ると、おもに以下のような事実がとりあげられる。

1・1 [o] が行音は、まずこの方言に通行のものとされよ

う。年長者にも、[o]とともに[o]の間かれることもあるが、一般には、「か」はよく聞かれる。学童たちには[o]が顕著である。（例「アナガ」「アイテ」穴があいて）おとなに「シク」「マエニ」（死ぬ前に）のような言いかたがある。が行音の[e]のやわらかくよいことを証するものであろう。

1・2 [se] これは普遍的でない。[se]も。老人でもだいたい[se]を言わない人もある。かといって、[se]を言う子どももある。

1・3 [i] すこしく鼻母音が聞かれる。「イマンコロ」（今ごろ）など。「コンベヤ」（子を産むへや）のような発音になったものもある。

1・4 [e] 「精米機」を一老男は「シェイマエイク」と言った。「シェー」ではなかった。一個人にとどまらぬことのようにある。

1・5 「一音節名詞長呼」「ターオ」（田を）など。「古米」も「コーマイ」と言う。

1・6 連母音相互同化 [e]V[e:]、これは男女に多少の傾向である。[o:]V[e:]もある。「オテーテ」（落して）な

ど。

1・7 イ音使 「出して」V「ダイテ」、「おろして」V「オロイテ」のようなのが一定的な傾向になっている。

1・8 縮音 「気をつけにゃ」が「キーツケナ」となっている。(「Ja」V「na」)これは、聞こえのうえでの「にゃ」拗音が「ナ」と直音化したもので、聞こえの印象では縮音の感がある。近畿地方では、「……せにゃ」が「セナ」とあるか。それに似る。ところで、他方には、「オマイ ドコイクンニャー。」(……どこへ行くノヤ。)の言いかたがあり、この方は「ニャ」がひびく、ここには文字どおりの縮音現象がある。「ヨメニ クルンニャデ。」(嫁に来るのだから。)なども言う。

「イッシャ ナー。」(いっししゃ ナー。)、ここにも母音脱落の縮音がある。「モエ モエー。」(もういいもういい。)のような縮音もある。「チョコシノ ユニ」(ちよっぴりの湯に)、このような縮音もある。「ヨガツテ」(用があつて)、このような縮音もある。「テナワン」(手にあわん)このような縮音もある。「活動写真」はおとなが「カッターシヤシン」と言う。「ひるから」は「ヘッカラ」となる。「そうですジャ。」は「ソーデッジャ。」となる。「お呉れ」は「オツケ」になる。

1・9 略音 縮音には音脱落がある。脱落の大きいものを略音と呼んで別にしてみる。「タイムネー」(たわいもない)には略音を認めてよからう。「わすれて」は「ワシエテ」となる。「カッテ コイテマウ」(刈ってこいでしまつた)のような言いかたもある。これなど、脱落はそう大きくはないけれども、聞こえのうえでは、略音の感がかなり大きい。「オアンナシテ」(おあがんなして)や、

「ヨインナシタ。」(ようおいでナシタ。)では略音が大きい。「ンナ キツイジャ ワネ。」(みんな達者だわね。)
「ンナヤ ルンデス。」(みんな……)も略音の大きいものであるが、これではことに、略されたあとの「ン」にはじまる語音の聞こえが、私どもの注意を引く。「ウランテナ」(ウラみたいな)というのもある。

1・10 「ン」化 文表現の音声の中で、「ン」はしばしば特異にひびく。その点で、特定の「ン」化が注意される。「シン(死に)トモネー」はその一つである。「杉葉」は「スンバ」と言う。「味無うて」は「アンノテ」である。さらに注目し得るのは、「になう」の「ンナウ」である。「ニノーテ」は「ンノーテ」と言う。「ン」音がきわ立ってひびく。

1・11 音転 「……とはオマワン(おもわん)。」の言いかたが全般におこなわれている。

1・12 異化 「オシエツカゴ。」というあいさつことばがある。人の働いているのをねぎらつて言う。この「ゴ」には、「お折角」をあいさつことばとして安定させたおりの異化が認められはしないか。「竹の棒」は「タケノバエ」と言う。

1・14 まとめ 以上の中では、縮音・略音の大きい勢が、注目すべきものだと思う。「ン」の聞こえのことも、大きくとりあげられる。「ニ」が「ン」になるさまざまの事実は、特に注意される。

以上は、発音の生活を動的に見ようとして、音素論をも包摂するつもりで、一つの整理を試みたものである。音韻論と音声学との有機的關係を重んじようとすれば、音声の聞こえの効果を重んじることになるのではなからうか。

1' 文アクセント

当方言の音声面について特筆すべきは文アクセントである。私は、この地方の文アクセント傾向の特色こいものを、中止的抑揚と呼んできた。文表現中の話部（スピーチのパート）の末尾で、特異な抑揚をおこすからである。このことは文末にあつても同様である。——しかも、中止的表現法でしばしば文が終り、そこに特異な抑揚がくる。こうした事情からは、中止的抑揚の呼び名を用いてよいと思う。が、今回は、その抑揚の實質に着目して、これを「ゆすりアクセント」と呼んでみる。

織田方言文アクセントの傾向を探索吟味して、類型的なものを求めていくと、私どもは、代表的・中核的なものとして、——この方言を代弁するようなものとして、「ゆすりアクセント」傾向をとりあげることができる。一步、当地方にはいればただちに耳にすることができると、あの異色あるふしまわしが、ここに言う「ゆすりアクセント」である。たとえば、つぎのように言う。

○アルケド、
あるけど、

○……ケド、
……けど、

○イロイロ アリマスケド、
……から、

文中の話部末でも文末尾でも、同じ「ゆすりアクセント」がおこる。

○……サケ、
……から、

○ダレモ インサケエ、
……から、

これは話部末での例である。「サケ」と、長呼母音上に上げ調子をもうけたものが「ゆすりアクセント」であることは明らかである。同時に、「サケエ」と、きよくたんに母音長呼にしたものに

「エ」と高音をおいた抑揚も、明らかな「ゆすりアクセント」である。（「……ケド」というのも同様のものである。）こうしてみると、「ゆすり」の実態には二種のものがあることが知られる。

二種のものをつぎのように図式化することができる。

I ……………○ハ<>

……………○ハ<>

……………○ハ<>

注 右の○印は音節を示す。<>は、「話部末または文末」の意。

○の場合、その音節の母音はいくらか伸びる。

○の場合、「……サケ、」のように、長音部の後半で、のおこることもある。

I ……………○ハ<>

注 これは、文末または話部末でこのような高音隆起のおこることを示す。——一種の「あとあがり」

調にはかならない。ただ、注意すべきは、当方言の場合、文末または話部末に長呼母音のあるところに、——その延伸母音上に、または延伸音を

含む一まとまりのものうえに、——の形式のおこることである。いかにも「ゆすり」の名

にふさわしいことである。

この二つの小類型があい寄って、聞こえの効果の顕著な「ゆすりアクセント」の流行をなしていると思われる。

右のIの場合、「……」の部分には、音の高低関係が、いろくに出でてきてもよい。

「……………○く」の場合、

○コレ ド コ ノ コ ヤ ロ。

これはどこの子だろ？

のように、高音が連続してもよい。

○ヨ|ン|ヒ|ャ|ク|エン オカエ|シ|マ|ス|デ|。

四百円お返ししますから。

のように、低音が連続してもよい。

○カ|ー|チ|ャ|ン|が、

母ちゃんが、

のように、高音が低音に落ちたところへ○がくるのもよい。(低

音部が二音節あってもよい。) どんな場合にも、話部末・文末の○が、相手へのつよい訴えの効果を發揮する。

「……………○く」の場合も、

○イ|ッ|カ|イ|ス|ル|ト|、

一回すると、

のように、高音が連続してもよい。

○…… ユ|ーン|ジャ|サ|ケ|ー|。

何々と言うんだから。

のように、低音のつづくところへ○がくるのもよい。

「……………○く」の場合も、

○ノ|ク|ト|テ エ|ー|ケ|ド|ー|。

ぬくくっていいけど。

のように、高音がいくつもあってその下に○がくるのもよい。

○イ|ン|ノ|ジャ|ー|。

いないんだ。

のようでもよい。

前段に高低音がどのようにこようと、つまるところ末尾で、

○ーや○ーがその抑揚機能を發揮する時、そこまでの文アクセントの流れは、その末尾部のけざやかなものによって大いに特徴づけられる。

図式の『の場合にあって、末尾にくる の前の部分は、どのようであつても、とどのつまり、末尾部の右の形式が、文アクセントの流れを決定的に支持し特色づける。末尾部の前にくる部分のいろ／＼なありさまを見よう。

○オ|キ|ャ|ク|サ|ン|モ、ヨ|バ|レ|テ カ|エ|ン|ナ|ル ト|キ ニ|ー|。

お客さんも、ごちそうになってお帰りにする時に。

これでは、最後の一話部で、 の形式が見られることになつてゐる。

○ホ|ン|ノ オ|タ|コ|ト|バ|ヤ|デ|ー|。

ほんとの織田のことばだから。

これでは、最後の一話部で、 の形式が見られることになつてゐる。この形式と前者形式とは、類同の關係にある。

○バ|ン|ナ|ラ|ア|ー|。

晩ならね。

○ホ|ン|デ|ー|エ|ー|。

それでね。

○ア|ノ|ー|オ|ー|。

あのね。

これらは、みな一語部から成っているセンテンスであり、おの、その末尾のはなはだしい長母音のうえに、 $\left. \begin{array}{l} \text{ } \\ \text{ } \end{array} \right\}$ の高音隆起を見せている。その前の高音の出かたはまぢくである。しかし、右の三例は、みなそれぞれに、代表的な「ゆすりアクセント」例と言えるものになっているのである。前段はどうであろうともさしつかえない。しめくりの形式が、大きくものを言う。

以上の二つの小類型では、じっさいに、 $\left. \begin{array}{l} \text{ } \\ \text{ } \end{array} \right\}$ 図式のものの方が、活動力が大きいようである。この方が主となり、いま一方の小類型の方がそれに随伴するおもむきのようである。ともに長呼母音に関係するものなので、二小類型の相関性は明らかである。このまとまりのうえに、「ゆすりアクセント」の面目が認められるわけである。

「ゆすりアクセント」は、女性のがわに、よりさかんにおこなわれていようか。老男の階層には、「ゆすりアクセント」が比較的すくなからうか。さてそのさかんにこれをおこなう女性たちが、ぞんがい、このゆすりに気づいていない。このような人に出あう時、なるほどそうだからこそ、こんなにもゆするのだなとも思わせられる。「ゆすりアクセント」は、現代にさかんな文アクセントなのである。

小学校の低中高の各学年を参観した時も、児童の教室ことばに、はなはだしい「ゆすりアクセント」を聞くことができた。しかも男女の多くの児童に、まんべんなくこれがおこなわれているのを見た。教室のことばは方言のままではなくて、むしろ学校ことばは共

通語的なものVと言えるものである。それが、まず例外なしに、「ゆすりアクセント」に載せられているのである。たとえはつぎのようである。

○アノオー、コレオー、ここへ持ってきて、コノオー、……

ココントコイ クツツケテ。 〆六年生女子発表V

○アノオー、チガウ カタチニ ナットー(なると)、

〆六年生男子発表V

○ダカラ、…… ヨンカケル ロクト ユーノワ、フタツ

アルカラ、……コレワ、……ワカリマスカ、ワシワ、

コノ テンカイズオー、 〆六年女子V

○ハチ カケル ロク カケル ニト ユーノワ、…… フタツ

アルカラ、 〆六年男子V

「ゆすりアクセント」はしばしば特殊簡潔なセンテンスを成立させる。右の小学校児童の言表例の「アノオー、コレオー、」を見ても、じっさいに、「アノオー」などの下部の休止は長い。それは、一文の断止を思わせるにじゅうぶんである。長呼母音のうえの特定の抑揚は、文の造成を左右しがちである。こうして、「ゆすりアクセント」による短いセンテンスができる。このようなセンテンスのさかんな造成は、方言の文表現の生活を特色づけたいではおかない。どんな形式のものの場合でもであるが、文アクセントは、けっしてただの音声面の事象にはとどまらないで、表現の生活に深くかわっていく。

「ゆすりアクセント」傾向について、もう一つ、やはり当方言の文アクセント傾向と見られる「高音連続」調を指摘しておこう。

○オタジュー アルイタカテ、

織田じゅうあるいたところで、

○デケン トキニヤ ヤッバー、

できない時にはやはり、

のように、助詞まで被って高音をつづかせるのが、たしかに一特色と認められる。この「高音連続」と、文末・語部末の「ゆすり」とは、相互に映発しあつて、はっきりくは、「高音連続」が「ゆすり」の間こえの効果を高めているか。

2 表現法

2・1 文末詞 センテンスのしめくりに用いることばに、「ノ・ナ・ネ、ヤ・ヨ・エ・イ、サ・ゾ、カ・カイ・ケー・ガイ、ゲー、テ・デ、ニヤ・シャ・ジャ、チャ、モン、トコト、ワ・ウェイ、モ・マ」などがある。多種多彩である。

「ノ」と「ナ」とでは、「ノ」の方が「よいことば」になつてゐる。「ナ」は最低。友だちには「ナ」。“などという。

○サプイ ナー。

と言うと「上」の言いかたになり、「サプイ ナー」は「わるい」という。

「ジャ」を、つぎのようにつかう。

○ナンデモ トイテ ジャ コトが あつたら、ユーテ アゲル ジャ。

何でも聞いたことがあつたら、言つてあげるよ。△七十

六才女▽

○ナカン ジャー。

泣きはしないよ！ △小五女▽

○アブナイ ジャ。

あぶないよ。 △老男▽

越前、当方言に、「ジャ」がこのように老若につかわれている。

「サ」を、つぎのようにつかう。

○カエロ サー。

帰ろうよ。

○モー シマオー サー。

もうおしまいなさいよ。

したいし仲で「サ」を言う。老若ともに、ふつうにこれをつかつてゐる。

ちなみに、西どなりの四ヶ浦町では、「ナンジャ シー。」

などと、ことばの終りに「シー」をつける。“という。

「マ」を、つぎのようにつかう。

○ハヨ イケ マー。

早く行けよ。

石川県下に頼用されている文末詞「マ」に近いものが、こうしてこの地方にも聞かれる。ごく稀にまた、石川県下のものなみの「トコト」が聞かれる。「イヤトコトー。」（いやですよ。）など。

○イヤ ワエイノー。

いやだよ。

の「ワエイノー」も石川県下のと同じものである。

2・2 敬卑表現法 表現上、待遇敬卑の意識を直接に表示する要素をひろつてみれば、つぎのようなものがある。（活用のことば略）

ナシ(なさいまし) たて ナーレンセ ナレンス

ナハル ナル ナサイ・ナセー

マス・ンス ゴザンス・ゴゼンス デス

クサレ サラセ

だいたい、こういうものが主要素になっている。

当方言で、尊敬の表現法にもっともよく用いるのは、「ナル」(なざる) 助動詞である。さてこの「ナル」に「ます」のむすびついたものか、「ナレンス」というのがあり、つぎのようにつかわれている。

○ネマツテ イナレンセ。

すわっていなさいませ。

○オンメーナレンシタ ケ。

おしまいなさいませか。

「ナレンス」ことばは、おもに老人層に聞かれる。「ナレンス」同様、「()ンス」の言いかたになるものに、

○タノメンス ワネ。

たのみますわね。

○モー イケンシヨカ。

もう行きましようか。

のようながある。これらは、「タノム」「イク」を「エ」段に活用させて、それに「ンス」をつけた、と言いうる形になっている。この二例は、相手に自分の気もちを表白するものである。その「たのめ()ンス」などの「ンス」は、「ます」相当のものであるろう。「たのめンス」などと同じ形式の「()ナレ()ンセ」などにある「ンス」もまた、「ます」に相当するものと解される。その「ま

す」が「ナル」に複合しきって、一体の尊敬動詞「ナレンス」ができてくるのだと思う。

「ナシた」の「ナシ」も、「ます」の合体しきったものである。

「ナス」の言いかたはない。「ナシ」の例をあげよう。

○ドツカラ オインナシテ オクンナシタンデス。

どこからおいでになって下さいましたのですか？

「ます」相当の「ンス」であることの認められる、丁寧の表現法の例を、つぎに掲げる。

○アニキラワー、ヨー ユーテ クレンスケド。

長男夫婦は、よく言ってくれますわ。

○モー イキンス ワハ。

もう帰りますわね。

「ナハル」尊敬助動詞を、「ていねい」の言いかたに転用したのに等しいのが見られた。

○ニホン アンナハル。

二本お持ちだ。△雨がさV

車馬の表現法の一例をあげる。

○アツチー イキサラセー。

あつちへ行きやがれ！

2・3 特殊な表現法 さまざまの注目すべきもののあるうちから、すこしものをあげてみよう。

「ちがう！」ということぞ、

○ナーモ。

と表現する習慣は、石川県下の「ナモ。」を連想させる。しかしここでは、「ナモ。」とはならない。

他家を訪問して、「戸をあけモツテ」こう言う。

○オイデナサイ。

「いらっしゃいますか。」というようなものであるうから、しごくもつともな言いかたとも言える。「ゴメンナサイ。」の次に位する言いかたであるという。

「そんなことまで言わなくてもいいのに。」の意の時、

○アマナ コツチャモ。

と言う。

命令の言いかたに、

○アッチデ シテ コー。

あっちでしておいで。

○オンチャンニ アギョー。

おじさんにおあげ。

のような言いかたがある。

「何々には勝てない。」ということぞ、たとえはつぎのように言う。

○シカウラノ サカナナ ナラン。

四ヶ浦の魚には勝てない。(四ヶ浦のが一等だ。)

「おいそがしいのに、どうもお手をとりました。」と私が謝したところ、相手は、

○ホンナ ソバジャ ゴザンセン。

それどころじゃございません。かまわないんです。

と答えた。

人がよく「エチゼンノ マガイコトバ」と言つて説明してくれた表現法がある。

○アカルイクライ ヨ。

明かるいとも!

というのがそれである。「アカルイ」↓「クライ」とつづくので、人は「まがいことば」と言っている。「何々クライ」の言いかたは、じつは、

○イーマスケレーネ。

言いますとも。

○今でも 言うクレーノ。

○ホージャクレー。

そうだとも。

などと、広くつかわれている。ただし、今日では、これが老年層寄りのことばになつてきているかのようである。時に「グレー」も聞く。よそを訪ねてのぞんざいなあいさつに、

○インノ カー。

いるのか。

とも言えば、

○ダレカ イタン カー。

とも言う。「いたんか」は完了法の言いかたになっている。

「理解がいかぬ」ことを、たとえはつぎのように言う。

○ウラー そんなことでは ハラー フクレン。

わしはそんなことでは、じゅうぶんでない、腹へはまらん。

「ハラフクレン」は「腹が ふくれん」である。

○ウララ ハレハマラン。

わしら、なっとくがいかない。

では、「腹へ はまらん」が、「ハレハマラン」と熟している。ついでに出せば、「うらやましがる」の意の「ガマンヤク」がある。これが時おり「ガマヤク」に近く聞こえる。

「ガテラニ」の一用途に、つぎのようながある。

○タンボガテラニ ヤツテタ。

百姓をしながらやっています。

接辞「ラ」の用法にも注意すべきものがある。「ハンミチラホド」(半道ほど)のような言いかたをする。

私の方言調査の生活を見ていて、老男の人、

○シャバシャバジャ ノー。

人それぞれの世わたりがあるものだね。

2・4 助詞の使用 これに関して興味ぶかいことの多いのは言うまでもない。そのうちの二つをとりあげる。

一つは、主部助詞の「は」「が」の使用に関してである。他の一つは、接統助詞の「サカイ」「ケー」に関してである。

主部助詞「は」は、はっきりとした「ワ」の形では出ないのがふつうである。

○コンノチノ オツツァー イル カー。

このうちのおやじさんはいるか。

○キサノ ドコイ イクンジャ。

おまえはどこへ行くんだい。

主部助詞「が」がまた、はっきりとした「ガ」「が」の形には出ないのがふつうである。

○ゾーヤ イル。

雑用がいる。

○トシャ イクト ムゴイ モンジャ ノー。オババ。

年がいくと、いとしい「もんだね。ばあちゃん。ハ若いものが何とも言ってくれないから。V

○イシー ジャマン ナルサケー、

石がじゃまになるから、

○オナカ ニヤニヤト イテー。

おなかが「じり〜」と「いたい。

「が」の言いかたの、「が」とは「が」よりも出ることもある。

○ギョイガ ツイテ キタ。

行儀がおこなわれるようになってきた。

「が」のなごりを見せるのが、「ハカン イク」(はかがいく)などではなからうか。

○アメア フツテ キター。

雨が降ってきた。

○アメア フリマステ。

雨が降りますから。

などというのは、「アメガ」からこう転訛したことをよく見せているものかもしれない。(「アメア」がやがて「アミヤ」になるのだと思う。)(「晩」のことを「バンエ」(B)と言おう。「晩げ」[Be]が「晩エ」[e]になったか。同じようにして、「が」[ga]が「ア」になったのかと思う。北陸地方にも近畿地方にも東北地方にも、主部助詞の「が」をはっきりと形に出さない所がある。いずれも「g」音のおこなわれる地方のことのようである。

つきには接統助詞を見る。

○スキナ モンジャサケー、

○スキナ モンジャケレ、

すきなものだから、

右の両者は「オンナシ」イミデ ゴザンス。“という。接続助詞「サカイ」は、「サカエ」「サケル」ともなっており、「サカイニ」と言う人も稀にある。「サケン」もある。それらと同じ用法のものに、「ケル」がある。「ケル」はどういう「ケル」か。「……ジャ(ヤ)」の言いかたの時に限って、「ケル」も存しうるのが注意点である。

○オボエトル モンジャケネ、

おぼえてるもんだから、

の言いかたもあつた。

3 語詞・語彙

3・1 生活語彙の中核的地位にあるもの一つとして、副詞語彙を見ることが出来る。織田方言の副詞語彙中にも、注目すべき副詞が多い。「カスナ」(とても、たいへん)、「カステンコニ」(おおげさに)、「ムタート」(ムネがムタートシル。気分がわるいということ)、「シナット」(やわらかにゆっくりと)、「ハツシヨクシヨ」(何もかも)、「アマンナ」(たくさん)など。

3・2 形容詞・形容動詞 この生成・群落と、語義とが注目される。形容詞の「キツイ」は達者なことを言う。(「前ころのことば」)ともされる「カタエイ」もある。「アシユグラシー」は「せわしい」である。「コツベクサイ」はなまいきなことを言う。

3・3 名詞 これらの性向語彙を見るとおもしろい。「ワザエイモン」は、人にわるいことがあつたら喜ぶ方の男。「ヤダモ

ン」は、大悪人。「アヤ」はばか・阿呆のこと。

3・4 造語法 「搔く」に当たる「カクサク」がある。「出しど、とはする」というような「出しごと」を、「ダシシゴト」と言うのを一度聞いた。「ソラクチ」(空口)は、わらで編んだ大ぶごのこと。「ドンドン」はおちゃんちゃんのことを言う童詞である。

4 おわりに 織田方言は、越前平野部方言状態の中で、その平野地方のことばの通有性を多分に担って成立しているものだと思う。この織田方言をおして、越前平野地方の方言状態を推察することができ、かつ、越前東部山地方の方言状態の大すじをも推察することが出来るように思う。

文アクセント上の織田方言特色は、だいたい、越前地方のことばの特色と見てもよさそうである。「ゆすりアクセント」は、石川県に行くとき、聞きにくくなる。

ところで、若狭辺々には、「ゆすりアクセント」が聞かれる。(丹後半島にも)求めれば京都ことばまで、その系脈がたどられる。織田方言を含めて、越前地方のことばの地位を問題にするならば、つぎのように言うことができようか。

当地方言状態は、「近畿地方主体のことば」の状態と、「中部地方北側(北陸がわ)大部分のことば」の状態との接衝状態を呈示しているようである。

と。「ゆすりアクセント」傾向も、この接衝地域に成立した特異な文アクセント傾向ではないかと察せられる。

(四三・一二・一一 稿)

四四・二・四 訂)

本稿のあらすじは、去年十二月十五日、岡山大学での「国語学会中四国支部年会」で発表いたしました。——広島大学教授——